

『コドモノテンチ』

鷹見久太郎が生み出した第2の絵本の王様

野口雨情、北原白秋、西奈八十、武井武雄、岡本帰一、清水良雄、中山晋平、また若き日の東山魁夷など、一流の詩人、画家、音楽家を擁し、児童文学史上に燦然と輝く絵雑誌『コドモノクニ』。東京社を興し、絵本の王様と呼ばれる『コドモノクニ』を創刊・編集していたのが、古河出身の鷹見久太郎であることは、皆様、もうご承知のことと思います。

写真をご覧ください。右側がその『コドモノクニ』の創刊号です。では左側の雑誌はご存じでしょうか？

この雑誌、その名も『コドモノテンチ』。見るからに『コドモノクニ』そっくりです。

それもそのはず。実は、この『コドモノテンチ』を創刊したのは鷹見久太郎。内容的にも『コドモノクニ』で活躍している詩人、画家、音楽家がそっくりそのまま『コドモノテンチ』を彩っています。

昭和6年、久太郎は訳あって東京社の経営権を譲渡します。しかしながら『コドモノクニ』への愛着は絶ちがたく、2年後に「子供の天地社」を創立、『コドモノテンチ』を創刊します。

創刊の辞で久太郎は述べています。「単に子供の繪雑誌を作るといへば、如何にも容易のやうですが、深く考へれば實に至難な大事業でありま

す。斯る困難な而も最も責任ある事業を敢てしやうとするには、自己の名利を顧みず、皆様の愛児方の爲めに、犠牲をも拂ひ、努力をも厭はずたゞ一意童心を以て事に當らねばなりません。私共は『コドモノテンチ』が賢明な親御さん方から、愛児の爲めの良いお友達であり、榮養價のあるお菓子であり、好適な玩具であり、且又よい指導者であると賞讃されることが第一の希望であり、何よりの歡喜であり目的であるのであります」と。

子供のための真に有益な絵雑誌を作りたいという久太郎の真摯な姿勢、幼児教育に対する真剣な態度、熱情をかいま見ることができます。

こうして発刊された『コドモノテンチ』ですが、次第に軍国主義化していく時勢にそぐわず、二年足らずで廃刊のやむなきに至ります。そのため発行数がきわめて少なく、長い間、『コドモノクニ』の模倣的作品、亜流とみなされ、あまり顧みられることがありませんでした。しかしながら執筆者の陣容、そして何よりも、子供のための一流の絵雑誌づくりを目指す久太郎の熱意を鑑みれば、『コドモノテンチ』は第2の、いや、むしろ『コドモノクニ』そのものであったといえるかもしれません。



『コドモノクニ』(右)と『コドモノテンチ』(左)。いずれも創刊号。